

町民参加の町史づくり



竹富町史だより

2000・3・31

第17号



竹富町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地
TEL・FAX兼用(09808)2-9985

目次

第15回町史編集委員会……………	1
《竹富町史編集委員会トピック》	
波照間島の史跡巡見……………	2
沖縄県地域史協議会研修会……………	2
《史料紹介》	
八重山島管内西表島仲間村巡検統計誌……………	3
《聖地めぐり》	
佐久伊御嶽……………	26
《写真にみるわが町》	
自然廃村の網取集落……………	27
《文化財探訪》	
花城村跡遺跡……………	28
収蔵図書紹介……………	29
業務日誌……………	32
編集後記……………	35

・表紙の写真・

波照間中学校の生徒が修学旅行した時に撮った記念写真である。生徒はほとんど三年生だが、八重山郡の中学校野球大会およびバレーボール大会に出場した選手も含まれており、一部、二年生もいる。1948年（昭和23）から1949年（同24）に生まれた生徒らは、第一次ベビーブーム期のいわゆる団塊の世代。卒業証書台帳をみると、人数は56人を数える。学校は当時、生徒数も多く、活気に満ちていた。撮影場所は、バイン缶詰工場であろう。父母の姿も見られる。

第15回町史編集委員会を開催

―第10巻資料編「近代」等を審議―

竹富町史編集委員会(本成善康委員長)

の第十五回編集委員会が二月五日、町史編集室で開かれました。



第10巻「近代」等を審議した第15回町史編集委員会

議題は第十一巻資料編「新聞集成Ⅳ」、

資料集①「鉄田義司日記」、第十巻資料編

「近代」の発刊についての三件。「新聞

集成Ⅳ」は平成十二年度に発刊すること

を決め、今後、印刷業者と契約を結び

印字作業に着手する、としました。「鉄田

日記」は、主題に副題を添えて、今年度

に編集、発刊。「近代」編は、史料の性格

から数ある史料を分冊して、順次、発刊

することを確認しました。

町史編集委員会では、まず、本委員長が「事務局から三件の議案が提起され

ています。各委員のご高見を賜り、案件

の内容を詰めていた、なければ幸いです」

とあいさつされ、委員の協力を求めまし

た。安里碩八室長が業務経過報告を述べ

たあと、実質審議に入りました。

第十一巻資料編「新聞集成Ⅳ」は、一

九四七年(昭和二二)から一九五五年

(同三〇)までに、八重山で発行された

海南時報、八重山タイムス、南西新報、

自由民報、八重山毎日新聞、八重山新報

の六紙を取り扱おう、というものです。

すでに収録記事の選定を終え、現在、発

刊に向けて準備を進めております。

資料集①「鉄田義司日記」は、主題に

本書の内容が分かるように「船浮要塞重

砲兵連隊の軌跡」との副題を入れ、すで

に印刷業者も決まり、全原稿を業者に入

稿済みです。今年度の発刊を目指してお

ります。

第十巻資料編「近代」は、「近代」①

崎原家文書抜粋・宮良殿内文書抜粋(仮

題)、「近代」②竹富島喜宝院蒐集館文書

「近代」③官報、と分冊して発刊しよう

というものです。編集構成は、上段に翻

刻文、下段に意訳文、史料の末尾に語注

を入れ、総説、解題を付して親しめる資

料編を目指しております。発刊は崎原文

書抜粋等が平成十三年度、喜宝院蒐集館

文書が平成十四年度を見込んでいます。

官報は、編集作業の進捗状況を踏まえて

発刊する、と決めました。

波照間島の史跡巡見



オヤケアカハチ生誕の地等を廻った史跡巡見

引き続き、午後から実施され、曇天ではあったが、充実した史跡めぐりでした。

町史編集委員らは、編集委員会終了後波照間島行きの定期船に乗り込み、一路島へ。同島の近海は冬場になると大荒れになるが、この日は少々白波が立ち、船が多少揺れるまですの天気。午後一時三十分マイクロバスを貸し切って、史跡巡見の「小旅」に出ました。

巡見した史跡は、長田御嶽、大底御嶽、オヤケアカハチの生誕地、下田原城跡、下田原貝塚、マシユク村跡、ミシユク村跡、ナビカキマス、ヤグ村跡など二十カ所。十五世紀後期の遺跡で石積みが残る下田原城跡では、往時の形態を今に残す保存状態のよさに編集委員一同は感激。マシユク村跡では講師を務めた、編集委員の玉城功一氏が「マシユクマヤピラアヨ」を歌い大好評でした。

島の西側にあるミシユク村跡でも、遺跡の中に足を踏み入れ、かつて使われた古井戸と石垣を見学しました。巡見では途中、島の景勝地である高那崎に立ち寄り、自然の素晴らしさを満喫しました。

沖縄県地域史協議会研修会

西表島で二度目の開催

沖縄県地域史協議会（外間政明代表）の一九九九年度第二回研修会が、昨年十月十四日から十六日までの三日間、西表島の大原を拠点に開催されました。今回は、国指定の重要無形民俗文化財である祖納、干立の「節祭」に合わせて日程が設定され、中身の濃い研修会でした。

研修会は「廃棄文書と情報公開」がテーマ。初日は、「西表島西部の網取村（廃村）の行政文書などについて」（通事孝作）、「那覇市における廃棄文書と市史編集」（外間政明）、「沖縄市での廃棄文書の収集と保存」（廣山洋一）、「行政文書と歴史資料」（金城 善）と題する報告を受けて研究討議が行われ、様々な質疑応答が見られました。

研修会二日目は、祖納と干立の「節祭」を見学。伝統的な民俗芸能が次々と登場し、村落の歴史の一端に触れることができました。史跡も巡見しました。

《史料紹介》

八重山島管内西表島仲間村巡検統計誌

田代安定編撰

復命第一書類

八重山島管内西表島仲間村巡検統計誌

第廿八冊

民事部

戸数

科目	本籍	寄留
土族		老戸
平民	四戸	
合計	四戸	老戸

惣計五戸

人口

科目	本籍	寄留
土族		貳人
平民	男四人 女七人	
合計	拾老人	貳人

惣計拾三人

職別

科目	村役	大工	神職	農業	漁業	商業	医業	師員	渡守
男	老人	ナシ		惣人民中	ナシ	同	同	同	同
女			老人	同上					
合計	老人		老人	拾三人					

戸数姓名表

番地	宅番地	貳番地	同番地	三番地	四番地	五番地	六番地
族籍	平民	同	士族	平民	同	平民	平民
姓名	金城	萬木 コヤマ	喜舎場保 頭	石垣貞勢	小浜力二 ナシ	大若ブナ リ	湧那金
男女	男	女	男	男	女	女	男
家族	独身	貳人	貳人	三人	独身	湧那 金妻	貳人
(年齢)		主五拾宅歳 女子三拾三歳	父五拾九歳 男子拾六歳	主四拾宅歳 妻之妻之	病ノ為二古 見村仮住	貳拾四歳	主四拾貳歳 妻貳拾四歳
氏唐名	ナシ	ナシ	戴長氏	ナシ	同	同	同

村民年輪表

年輪	拾六歳	拾三歳	貳拾四歳	三拾五歳	四拾歳
男	壹人		壹人		
女	壹人	壹人	壹人	壹人	壹人
合計	貳人	壹人	貳人	壹人	壹人
年輪	四拾壹歳	四拾貳歳	五拾壹歳	五拾九歳	總計拾三人
男	壹人	壹人		壹人	
女	壹人		壹人		
合計	貳人	壹人	壹人	壹人	

番地	族籍	姓名	男女	家族	(年輪)	氏唐名
六番地	平民	山城山太 竹富島寄人	男	獨身		ナシ
七番地	同	何盛ヒサ 力	女	獨身	同居 山城山太ト	同

生産死亡人表

合計十年
生人惣計
死人惣計四人

年号	同九年	同十年	同十一年	同十貳年	同十三年	同十四年	同十五年	同十六年	同十七年	明治十八年
生男										
生女					貳人	壹人	壹人			
死男										
死女										
生人合計					(壹人)	(壹人)	(壹人)			
死人合計										

六拾歲以上長壽人表

番地	
族籍	
年齢	
男女	
姓名	
無シ	

五人以上多子者表

番地	
族籍	
男子	
女子	
合計	

結婚者表

同	平民	同	士族	族籍
女	男	女	男	自十五 至十六
				自十七 至十八
				自十九 至廿
老人				自廿一 至廿五
				自廿六 至卅
				自卅一 至卅五

同	平民	同	士族	族籍
女 老人	男	女	男	自卅六 至四十
	貳人			自四十一 至四十五
				自四十六 至五
壹人				自五十一 至五十五
			老人	自五十六 至六十

同	平民	同	士族	族籍
				自六十一 至七十以上

惣計六人

欠偶者数

同	平民	同	士族	族籍
女 老人	男	女	男	自卅六 至四十
老人				自四十一 至四十五
				自四十六 至五十
				自五十一 至五十四
				自五十五 至六十

同	平民	同	士族	族籍
女	男	女	男	自十五 至十六
				自十七 至十八
				自十九 至廿
				自廿一 至廿五
				自廿六 至卅
				自卅一 至卅五

惣計式人
独身者表

七番地	六番地	四番地	老番地	番地
同	同	同	平民	族籍
拾六歳	四拾貳歳	四拾三歳	貳拾四歳	年齢
女	男	女	男	男女
何盛ヒサカ	山城山太	小浜力ニナシ	金城津野	姓名

同	平民	同	士族	族籍
				自六十一 至七十以上

惣計四人

上納人割前表

等別	人数	族籍	一人前貢納	一人前貢所遺
上男	老人	平民	七斗五升七合八勺一才	七斗貳升七合八勺六才
中男	老人	同	七斗八合老勺一才	七斗貳升七合八勺六才
下々男	老人	士族	三斗八升六合一勺	

惣計三人

上納人女子割前表

等別	人数	族籍	一人前貢米割	同貢布割
上女	三人	平民	七升六合六勺老才	白布老丈貳尺五寸七合
中女	老人	同	五升七合四勺六才	同九尺四寸三分
下女	老人	同	四升七合八勺八才	同七尺八寸六分

細上布八一人前老丈七尺五寸宛

免税人表

等別	人数	族籍	一人前貯蓄	合計
上男	老人	平民	七升三合六勺四才	老石五斗六升貳合貳勺八才
中男	老人	同	七升三合六勺四才	老石五斗老升貳合五勺八才
下々男	老人	士族		三斗八升六合一勺

族籍	職別	年齢	男女	番地	姓名
平民	村筑	四拾老	男		石垣真勢
同	渡場守	貳拾四	同		金城津野
同	亡筑登之妻	四拾老	女		石垣タマ一

貢布免稅表

同	平民	族籍
女頭	神職	職別
貳拾四	貳拾三	年齡
女	女	男女
		番地
大若ブナリ	萬木ヌヒマ	姓名

舟船表

船形	艘數
小形丸木舟	所有主
老艘	村用船川渡シ用

惣計老艘

家畜部
馬

年齡	頭數
壹才已上	牝老頭
老頭	老頭二付米三許
駄用	使用
老品	種類
本島	產地

惣計老頭

牛

年齡	頭數	売価	使用	種類	產地
老才已上	牝貳頭	老頭二付自米貳俵至六俵	耕耨	一品	本村
老才已上	同三頭	老俵之定価			
老才已上	牝七頭	自老俵半至三俵			
老才已下	同五頭	老俵之定価			

總計拾七頭

豚

年齡	頭數	売価	使用	種類	產地
老才已上	老頭	身量老斤二付米六合	食用	一品	本島

惣計老頭

犬

年齢	頭数
老才已上	貳拾頭
売価	老頭二付米老斗計
使用	狹用
種類	一品
産地	本島

惣計貳拾頭

鶏

羽数	売価
身量老斤二付米老升	使用
食用	種類
伯鶏	産地
本島	

地理部

神祠表

崎枝嶽

祭神名

位置

祠地広狭

祠制

祭日

右公祠

村民作田御神ト唱フ

南風見村内字作田野ノ海辺ニ在リ

六反許ニシテ樹木叢生ス

茅家根葺ニシテ広狭九式間四方

毎月朔日十五日

仲嵩嶽

村民仲嵩御神ト唱フ

同

同

同

同

同

村ノ西北部字阿嘉木明ニ在リ

六反余ニシテ福樹黒木其外雜樹鬱生ス

毎月朔日十五日

仲島嶽

村民仲島御神ト唱フ

同

同

同

同

村ノ東方字仲島ノ海辺ニ在リ

毎月朔日十五日

右私祠

已上三祠八朔日十五日又夕左ノ日ニ祭ル

毎年二月甲壬日諸農作物ノ為メ

同三月庚壬日諸農作物虫不付為メ

五月申庚シキヨマ祭

六月甲壬日穗利祭

三月十五日山留祭

四月庚壬農作物穗祭

七月巳亥節ノ祭

十月二種子取祭

右三祠所屬地惣反別式町余

諸反別表

一、田地惣反別九町老反五畝七拾八歩式分

内上納作地四町五反七十八歩式分

但シ拾三ガヤダ式拾九數当分耕作

民用作地四町六反五畝

但シ三方ヤダ三拾九畝当分耕作

一、畑地惣反別式町五反式畝拾三步六分

内上納作地ナシ惣テ民用作地二属ス

本村ノ畑地ハ惣テ蕃諸圃ト為ス

一、芭蕉栽付敷地惣反別式町三畝八拾三步ノ四分

但シ芭凡ソ四千株

一、鉄蕉栽付敷地惣反別式町六反三畝三步四分

但シ鉄蕉凡ソ式千株

一、宅地惣反別

但シ広壁東西

壱戸前凡

地価表

科目	上地	中地	下地	平均地価
田地	一カヤタ二付米拾俵	同五俵	同三俵	六俵
畑地	一コーヂ二付米五俵	同四俵	同三俵	四俵
宅地	十坪二付壹俵	同式斗 五升	同式斗	式斗五升
休作地	壹コーヂ二付三俵	同式俵	同壹俵	式俵

牧場表

惣反別

広壁

位置

東西式百三拾間南北八百間程

村ノ西北隅ヒサ山ヨリ起リ東北隅ヨリイタ山二亘ル

川溝

浦田川

位置

又夕前川ト唱フ
村ノ西南海岸ヨリ北方山奥ニ至ル

幅員

川口カラマ崎ト赤崎トノ幅員百五十間ニシテソレヨリ
潮次狹容トナリ四五十間乃至三拾間許ノ幅員アリ

長さ

能ク詳ナラスト雖モ舟筏ノ通ユル部分長さ壹里式拾八
町ソレヨリ水源迄凡ソ式里内外

水量

潮入川ナルヲ以テ水ノ深淺一定シ難シ即チ平時退潮ノ
節ハ式三尺乃至壹丈満潮ニハ六尺乃至壹丈二而シテ

川口ハ尤モ淺クシテ退潮ニハ歩シ渡ルベシ

水源

川源ヨリ詳ナラスト雖モ新城島所屬山林御座岳ヨリ発
スト云

川質

沙川ニシテ稀ニ石瀬アリ平時ハ緩流ニシテ処々清濁ヲ
異ニス兩岸荒次叢林ニシテ一望鬱蒼タリ

運輸

四時丸木舟ノ通行ニ妨ケス満潮ノ時ハ六反帆船モ壹里
半余遡ルヲ得

後川

同

同

村ノ東岸ヨリ西ニ漚廻シ北ノ方

ヒサ山を經ヘ「ヲリクチ」山中ニ通ル

幅員大抵五六間乃至八九間

同 長サ凡ソ千式百間程

同 半ハ潮入川ニシテ平時ハ川口ノ深サ六七尺川上ハ五六

同 尺ニシテ満潮ニハ川口ノ深サ丈余ニ至ル

同 源ハヨク詳ナラスト雖モ「ヨイイタ」山中「ホカスク」

同 山ヨリ発スト云

同 泥沙川ニシテ中腹已上ハ溪澗状ヲ為ス四時緩流ニシ

同 テ清濁定ラズ兩岸ハ雜木林ニシテ一目鬱然タリ

同 更ニ舟筏通シ難シ又タ碇橋ヲ設ケナシ甚ダ通行ニ不便ナリ

大繩川

同 本村ノ西南端南風見村トノ境界ニアリ

同 幅員大抵八九間乃至拾四五間

同 長サ凡ソ四百間

同 半ハ潮入川ニシテ平時水量式三尺満潮ニハ六七尺

同 源ハ南風見村ト黒島所屬山林トノ界ナル「カテル山中」

同 発スルト云

同 泥沙川ニシテ四時緩流ニシテ水清濁混ス兩岸ハ川口ノ

同 部ヒルギ林ニシテ中腹区上ハ草原間ノ田地内ヲ潜流ス

同 即チ田用水ニ供ス 更ニ舟筏ノ便ヲ得難シ

ヤラタ川

同 村ノ西北浦田川ノ近傍ニ在リ

同 凡ソ式三間

同 凡ソ四百五拾間

同 平時水量三尺乃至五六尺

同 源ハ黒島所屬山村「ナーバコ」山ヨリ発ス

同 溪砂川ニシテ水緩流清濁混ス兩岸雜木叢生ス

同 更ニ舟筏ノ便ヲ得ス

同 右惣許四ヶ所

橋碇表

一、大繩橋

位置 本村ト南風見村トノ境界ナル大繩川ノ中腹ニ在リ

幅員 壱間

長サ 式拾七間許

橋質 石脚ニシテ木板ヲ架ス

右惣計壱ヶ所

渡場表

一、前湊渡地

位置 本村ノ西部浦田川ノ末流ニシテ「カラマ」崎トサラ崎

トノ対岸ト為

幅員 此処川幅

水量 平時浅沙流ニシテ退潮ノ時ハ歩テ渡ルヲ得

渡舟 小形丸木舟壱艘

渡舟守 免稅渡守壱人

惣許壱ヶ所

山林表

一、プリミチ山

位置 本村ノ西北隅ヒサ山ヨリ起リ御座岳ノ東側マテニ在リ

周廻 凡ソ六里

幅員 東西式里南北老里許

境界 東ハ武富島山林西ハ黒島山林南ハ本村北ハ新城島山林

二接ス

山勢 本山ハ御座岳ノ岐山ニシテ其東南側ニ特立シ樹木鬱生

シテ其麓脚ハ深溪ヲ為シソレヨリ山脈東南ニ起伏廻亘

シテ半ハ浦田川ニ沿ヒ浦田山「モナリ」岳等ノ岐山ア

リヒサ山後部ヨリ東折シ「ヨイイタ」山ニテ終ル

惣計壺ヶ所

村内并山中樹木概表

木名 方言

赤木 アカンギ

村中又山麓ニ在リ 開四尺
已上ノモノ凡ソ式百七拾本

程

黒檀 クロキ

産所同前老尺開已上ノモノ
七拾本程

桑木 クワノキ

産所同前三尺開乃至八九尺
開ノモノ凡ソ百本

松木

産所同前五尺乃至老丈已上
下ノモノ凡ソ三千本四尺開

已上ノモノ數末等

栲樹 カシキ

羅漢松 チヤノキ

山中隨所ニ多シ

福樹 フクキ

榕樹 ガスマル

赤榕 カカウキ

蟄樹 ユス子キ

若棟樹 センダン

ダイノウウキ

屋良部木 ヤラブキ

エゴノキ スタマキ

楊梅 ムンキ

ガキ柿 ガアナキ

アサグロノ木 アサグル

カブリ木 カブリ木

クロテツキ トイキ

アクチノ木 アフチキ

赤テツ木 アデホキ

アハダン木 アサシキ

佐和藤木 ズルカキ

モクコク樹 イチヲ木

柯樹 スイニキ

ヤブクケイ タブノキ

ヤマノバンキ 同

ハスノハギリ トコナツキ

蒲桃 フードー

梯枯樹 デーイキ

秦皮樹 ズンキ

天仙杲柿

里山地表

仲島山

位置

幅員

反別

樹木

ヒサ山

同

同

同

同

田原後山

同

同

同

同

ヲリグチ山

同

同

同

同

惣計反別

字地表

古屋敷原○本村ノ中央ナル旧村落跡ヲ惣称ス 東西広サ百二三間許南北百間許此内旧上ノ村ニ属スル地跡式間町許下ノ村（即中島村）ニ属スル地積壹町許ニシテ現今ハ満面草樹茂生シ鬱葱トシテ極メテ荒蕪ノ觀ヲ為ス 而シテ當時ノ村跡及ヒ竹籬等尚ホ并然トシテ今日ニ形跡ヲ存ス 又タ処々ニ梯枯林アリテ其中ニ山藍ヲ培作ス 此反別合計凡ソ三反許

阿嘉棚○旧村ノ田畑跡ニシテ古屋敷原ノ東此部ニ在リ 東西貳百間南北百五拾間許此内ニ樹林アリテ仲嵩神社アリ 又タ諸圃式コーヂ「バカシタ」田地式カヤ敷半アリ 共ニ仲間村ノ作地ニ属ス 又タ草野壹町歩許アリ 旧上ノ村ノ畑地跡ナリト云

屋良部野○旧村跡ニシテ古屋敷原ノ西北部浦田川側ニ在アリ 東西貳百間南北百間許此内ニ兩村アリ 一ヲ屋良部村跡ト為シ一ヲ舟底堂村跡ト為ス 屋良部村跡ハ其北部ニ座シ地位高爽ニシテ殊ニ沃富シテリ 其地積凡ソ拾町歩許ニシテ一面草地ト為リ処々ニ樹林アリ 舟底堂村跡ハ其南部ニ座シ地位低旱ニシテ其地積凡ソ三町歩此内田地壹ガヤダ半野壹町歩余アリ又タ西北ノ川側ニ竹敷壹反余アリ 又タ西南角ニ当リ浦田川ニ面シテカラマ崎アリ 樹木繁茂シテ一藪林ヲ為ス 之ヲ「カラマ崎山」ト曰フ

ヨイイタ○村ノ西北隅ニ在リ 東西六百間南北六百許此内ニ西洗山一田スモヽリ及ヒ「ヨイイタ」ナル四田地アリ 其反別惣計八ガヤタ敷計アリ 共ニ仲間村ノ作地ニ属ス 又タ此田地ヲ挾ンテ草野三四坐アリ 此地積合計凡ソ壹町歩余ニシテ

此草野ヨリ起ル山林アリ 之ヲ「ヨイイタ」岳ト曰フ 即本村所屬林ブリミチ山脈ノ東南端ト為ス 又タ東南部ニ当リテ一ノ草野アリ 之ヲ「ヨリグチ」野ト稱シ田原後野ニ接シテ平広ナリ 其地積東西凡ソ百間方計ニシテ此内ニ田地式ガヤ敷アリ 此野ノ西ヨリ南ニ亘リテ後川ヲ帶ヒ之ニ沿フ樹林ヲ「ヨリグチ」山ト稱シ里山中ノ一二屬ス

田原後野○本村ノ東北ニ在リ 東西百間南北百間許ニシテ此内田地拾ガヤダ敷廢田拾五ガヤダ敷許アリ 之ヲ總稱シテ田原後田ト曰フ 仲間古見兩村及ヒ竹富島ノ作地ニ屬ス 又タ東部ニ当リテ草野中三ノ樹林アリ 之ヲ田原後山ト稱シ村林中ノ一二屬ス 旧村ノ藍圃跡ナリト云 其他ハ總テ草野ニシテ仲間村原野中ノ著シキモノト為ス 皆十旧村ノ圃跡ニシテ地味沃壤ナリ 但タ満面石塊填敷シテ地位平垣ナラサルノミキイ泊野○田原後野ニ接シテ東南海辺ニ在リ 東西二南北二二間許ノ草野ニシテ旧村ノ畑地跡ト為シ地位平垣ニシテ極メテ沃壤ナリ

ミイザキ野○本村ノ東端隅ニ在ル 松林野ノ總稱ニシテ東西八百間南北百間許地勢西北ヨリ起リ東南二傾キ下テ遠ク海表ニ突出ス 其東角ヲ浦崎ト曰ヒ南角ヲ「ナイヤ崎」ト曰フ 浦崎ノ近傍ニ小岩嶼アリ 之ヲ「赤バナレ」ト曰フ 又タ「ナイセ」ノ近傍ニアルヲ「ヨシキ離」ト曰フ 地勢一般平広ニシテ其間ニ無數ノ起伏ヲ生シ凹凸極リナクシテ其間ノ効松ヲ生シ野ヲ蔽フ 即チ凸廻ハ壑シテ凹廻ハ開テ田地ト為スベキナリ 此内ニアル仲間村ノ田地凡ソ五ガヤダ許 前ノゴノ潟原○本村ノ前面「カラマ崎」ヨリ後川側マデノ海

物産部

普通物産表

濱ヲ謂フ 東西貳百間南北平均七拾間ニシテ沙浜中ニ処々礁石ヲ雜ニ其南部ナル浦田川口ニ在ル小岩島ヲ「バサイ」離ト云フ 此周廻凡ソ三百間 右浦田川以東ノ字地ト為ス

品目	産額	価格	一コーチ收穫	播栽	反別	種類
米	拾六石		高			四品
秣米	拾五石					一品
餅米	壹石					一品
白大豆	壹俵半					一品
胡麻	貳斗					一品
蕃薯						三品許

特有物産表

品目	産額	価格	収穫	播栽	反別	種類
山藍	百五拾斤	拾斤二付米貳升	未詳			
苧麻	五六斤	売買セズ御用布				
藪拔						

同雑品

品目	産額	価格	旧藩	産額	同	価格	輸出先
海人	五拾	老斤二付米壹			同		
草	斤	升			貳升		商用
大名	拾五	老東二付子米					
竹	束許	貳					

農作季節表

品目	播種	移植	収穫	培養	方言
米	旧十月中 旬	自十二月中 旬正月上旬	自五月上旬至 十六月		マイ
豆 白大	自十二月 至一月	ナシ	自四月至五月 初旬		ホッタ コメ
蕃薯		二月七月両 度	四時		アコウ ン
山藍					カラア 井
苧麻					

諸菜蔬表

品目	蕃藷	冬瓜	綵瓜	薯蕷一種	同一種	養菜	ハンダマ	紫藷	蕃椒	薯蕷一種
播種	八月	一月	同	ナシ	ナシ	ナシ				
移植		二月	同	二月	二月	無即	同			
收穫		自四月至九月	同	自十月至一月	自十月至一月	四時				
培養										
方言	ダイコニ	スポリ	ナピラ	ヤマウン	ナリイモ	ウンツアイ	ハンダマ		ビイラ	ボウウニ

同救荒品

品目	馬齒莧	鉄蕉	ハタケアサ苔	阿禮実	猫頭竹筍	鳳尾竹筍	サルムシロ芽
産所	村中随処	同前	同前	同前	同前	同	同
食法		幹髓及ビ子口濃粉		生食煮食共			
方言	ヌズナ	ステツ	チーフクラ		アータケ	ンガダケ	サルムシロ

菓実類表

品目

方言

唐芭蕉
番石榴
蒲桃トウバシャー
バンジロ
フトウ

楨一種

同

同

阿実

アテンカ

同村農作物ノ季節覽表

品目	播種	移植	收穫	培養	方言
米	十月中旬	十二月ヨリ二月上旬	翌年五月上旬ヨリ六月上旬		マイ
大豆	十二月ヨリ	一月迄	四月ヨリ五月初此迄		

明治十八年度同村貢納表

上男 貳人 中男 貳人 下々男 壹人
上女 貳人 下女 貳人 下々女 壹人
一年貢三石九斗九合九勺七才

内

年貢壹石八斗七升九合六勺四才
貯蓋貳斗九升四合五勺七才
所遺壹石四斗五升五合七勺貳才
白細布壹反

明治十七年度貢納表

上男 三人 上女 三人
中男 壹人 下女 壹人
一年貢三石六斗九升貳合貳勺壹才
一 白上布壹疋
一 白下布壹疋

明治十六年度貢納表

上男 四人 上女 壹人 下女 壹人
一年貢三石六斗八升四合壹勺壹才
一 白納布壹反
一 白上布壹疋

輸出品表

科目 産額 總代表
米 八俵
山 藍 斤二付貳升百五拾斤 三斗
海人草 斤二付壹升七拾斤 貳俵壹斗
大名竹 壹束二付貳升拾五束
白大豆 貳俵壹斗 白大豆

輸入物品表

科目 数量 代価
上茶 拾五斤 壹斗五升
真塩 三俵 三俵

砂糖

七斤

壹斗四升

鍋大小

五枚

貳俵

真芋

三斤

壹俵壹斗五升

石炭油

壹升

壹升

西洋カシ

四斤

五斗貳升

紙

壹束

壹斗五升

贅付

壹斤

四升

種子油

壹升

壹斗

麦麴

五斤

壹斗

小麦

壹俵

壹俵

《解説》

—はじめに—

西表島東部の仲間川河口沿いに、かつて仲間村があったが、本史料は同村の村勢に関するものである。題名から一八八五年（明治一八）当時、沖縄県属と農商務省属の肩書きをもっていた、田代安定が二度目の八重山出張の際に仲間村を調査した復命書であることが分かる。田代は、この時、村落の実態を復命書にまとめるほか、調査の顛末を『八重山嶋取調始末内篇』として書き残している。

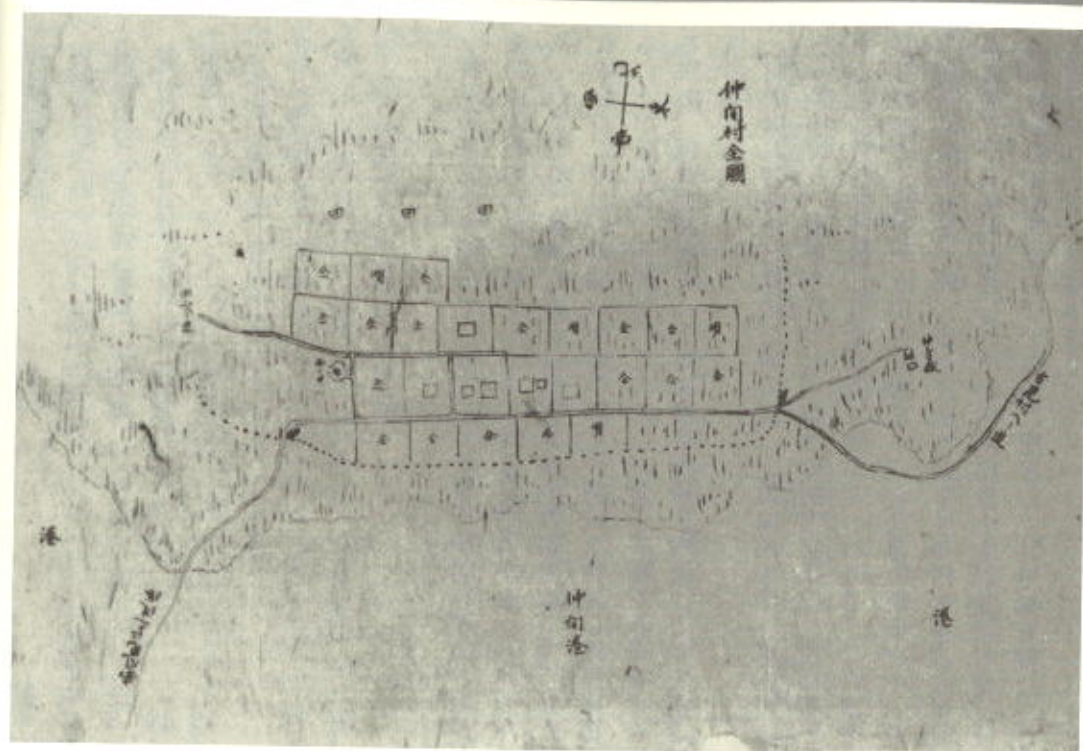
田代は二度目の八重山訪問の際、与那国島を除く郡内のほとんどの島に渡り、調査を行った。島々の調査結果は、復命書としてまとめられ、その数は五十余冊に及ぶといわれる。これは彼の履歴書自註に「明治十九年九月四日」。右八重山島滞在中、前山県内務大臣同島巡視の際、直命に依り調査する所の事項を併せ、復命書類五十余冊を編成し、これを内務省土木局長西村捨三氏、前沖縄県知事の關係をもつて同氏に提出し、其処置を仰ぐ」との記述があることから判断できる。

しかし、すべての復命書の行方は分かっていない。現在、確認できるのは、仲間村、鳩間村、大川村の三冊である。これらは、いずれも村名を冠し、巡検統計誌の表題が付いている。仲間村は第二十八冊目の復命書である。ちなみに鳩間村は三十五冊目、大川村は二冊目。調査項目は、ほとんど仲間村と同様である。

—復命書を作成した田代安定—

八重山郡内の島じまを調査し、巡検統計誌として復命書にまとめた田代安定は、一八五七年（安政四）八月、鹿児島市加治屋町に土族の子として生まれた。一八六九年（明治二）当時、同地の私塾・柴田塾でフランス語と応用博物学を学んだのち、一八七四年（同七）に上京、内務省御雇、博物館掛となった。だが、母の死去に伴い、鹿児島に戻り同県の勸業課陸産係の職員として勤務した。

八重山への初来島は、県庁に在籍していて農商務省からキナ樹百五十本を植える目的で沖縄出張命令を下された一八八二年（同



明治20年代中期の仲間村全図

一五)の時である。この時、わずか三日間の滞在ではあったが、島の生物層の特異性に目を見張り観察。その後、島の振興発展について『沖縄県下先島廻覧意見書』としてまとめ、明治政府に提出している。同書は原本があり、農業を中心とした産業について具体的な意見を述べている。

二度目の来島が、本稿で紹介する復命書を編成した一八八五年(同一八)である。彼はこの時、十カ月余滞在して調査し、八重山改革に対する理念と、その具体策を示した『八重山群島急務意見書』を明治政府に提出。しかし、彼の主張は明治政府の受け入れざるところであった。その後、一八八七年(同二〇)に三度目一九〇六年(同三九)には四度目の来島を果たしている。

— 仲間村の移り変り —

八重山群島に注目し、四回も来島している田代であるが、彼が復命書にまとめた、仲間村はどのような村落だったのだろうか。

最初に村の起源をみると、琉球王府時代において、同村は八重山三間切のうち石垣間切に属し、初め崎枝村と呼ばれ、それが後に仲間村と改称されたようである。『八重山島年来記』(康熙五十辛卯(一七一一年)の条に「仲間八竹富新城ヨリ寄百姓」との記述があることから、仲間村として再出発したのは、おそらく、この頃だと推察される。

しかし、村落の創建は資料不足から未詳である。『参遣状』(乾隆三丁巳(一七三七)の条に「男女五百拾七人、石垣ヨリ七里式拾六町、舟路、村廻拾四町」とあり、独立村として扱われてい



明治20年代中期の仲間村および周辺地図

た。人口は、記録から五百十七人。当時において、西表島では古見村、西表村に次いで多い。村の人口は、その後増え出し、一七五三年（乾隆一八）には五百九十人でピークになり、一七六〇年（乾隆二五）に五百五十八人、一七六一年（乾隆二六）には五百五十九人と、五百人台を維持している。

仲間村は仲間川河口の北側にあったが、同川を越え、南方に進むと一七三四年（雍正一二）に波照間島からの寄百姓によって創建された南風見村があり、村番所間は宿道で結ばれていた。また北方に行くと前良川を越えた、古見岳などを後背とする古い集落の古見村があり、同村へも宿道で村番所間を往来していた。

八重山を襲った歴史上の未曾有の自然災害である、明和の天津波（一七七一年）を記す『大波之時各村之形行書』に次のような記録がある。「頭高男貳百四拾六人、女貳百三拾貳人、四百八十二人罷在候処、大波石垣方一時二揚、男三人、女貳人、五人公事二付石垣江罷渡致溺死、男貳百四拾三人、女貳百三拾人、四百七拾三人罷居、村所并御嶽・井戸数無別条候得共、左之通波損仕申候。この記述から人口は四百七十八いたが、五人が溺死し四百七十三人に減少したことが分かる。

明和の天津波は、八重山の各村に多大な打撃を与えた。津波後は疫病や飢饉が続き、村を疲弊させた。『御当国御高並諸上納里積記』『人頭税賦課基本台帳』から、村位は布、米とも上位であったが、天津波の打撃はあまりにも大きく、村は衰微の一途をたどった。

津波後の約百年に至る期間の人口動態は、資料が収集できず不明であるが、一八七三年（同治一二）には戸数七世帯、人口二十

三拾六町、舟路、村廻拾四町」とあり、独立村として扱われている。



明治20年代中期の西表島東部地図



明治20年代中期の西表島東部の地形図

人と激減。沖縄県が設置（琉球処分）された、翌年の一八八〇年（明治一三）には戸数十世帯、人口十八人と僅かながら減っている。そして田代が調査した一八八五年（同一八）には戸数五世帯人口十三人とさらに落ち込んでいる。

田代の後に笹森儀助が一八九三（明治二六）に当地を訪れ『南島探験』に、その調査結果を書き記している。

仲間村ハ島ノ南海ニ接シ海面ヨリ少シク高ク其南西ニ仲間川本島屈指ノ大河ナリ。其源西北ノ山岳ヨリ長サ三里水ハ暗色ヲ帯フ。又村ノ東北ニ新川ト云フアリ。其流緩慢ニシテ水汚レ褐色ヲ呈ス。村ト此ノ川ノ間ニ沼田泥沢ノ地多シ。要スルニ仲間村ハ東西南ノ三面海及河川ニ圍繞セラル地ハ黒土質ニテ常ニ湿潤シ村内樹木繁鬱ス。村ノ周辺古昔繁成ノ屋跡四十余個ノ多キアリ。今ハ密林鬱葱シテ日光ヲ蔽フテ暗色ヲ呈ス。土地ノ湿潤ト臭氣ハ一見人ヲシテ慄然タラシム。

戸籍ヲ調ル人口九人ノ中四人ハ無病地ヨリ移セシ者ナリ。方言之ヲ寄セ人ト云フ。児童年齢十五年以下ノ者ハ一人モナシ近況ヲ以テ之ヲトスレハ本村ノ滅亡ハ必ス遠キニアラサルヘシト思ハル

笹森の予言どおり村は廃村になったが、『琉球新報』一九一〇年（明治四三）十二月二日の記事資料によると「明治三十七年、仲間村はマラリヤ病の為戸口減少廃村となれり」とある。上記の記事を踏まえ、人頭税が廃止になり、新税法が施行された一九〇三年（同三六）の翌年、一九〇四年（同三七）に村は滅亡したことになる。

仲間村跡は現在、一九五二年（昭和二七）に琉球政府の計画移

民により誕生した、大富集落があり活気に満ちている。仲間村当時橋梁はなく、渡し舟で南風見村へ往来していたようだが、現在では近代的なコンクリート橋が架かり交通の要衝となっている。村跡には八重山先史時代の仲間第一貝塚、仲間第二貝塚が広がり往古から居住に最適な場所だったと思われる。

―復命史料の分析―

八重山管内の巡検と称して田代が訪れた時の仲間村は、村番所はあったものの、人口が少なく行政村として成り立っていたのだろうか。笹森儀助の著した『南島探検』の記述から推測すると、一応、村の形態をとっているが、マラリア等により暗澹たる惨状にあったものと思量される。当時は、まだ人頭税が施行されており、体験者の証言等を敷衍してみると、村人の暮らしは苦渋に満ちていたであろう、と推量される。

統計誌は、民事部、家畜部、地理部、物産部の四部門に分けて記述する。内容を分析すると、当時の村勢が浮かび上がる。

民事部は戸数、人口、戸数姓名、村民年齢、上納人割前表などを盛り込む。村は戸数五世帯、人口十三人。内訳は土族一世帯、二人、平民四世帯、十一人。土族は、村頭を務めていた戴長氏の喜舎場保頭である。八重山は当時、歳元の後を受けて設置の島役所時代で、役所長は西常央。村頭は村番所に勤めていて、島役所の指導を仰ぎながら村政を司っていたようである。

村民年齢表をみると、村人の年齢は十六歳から五十九歳までで人頭税の予備軍である、子供たちが一人もいない。また人頭税の

対象年齢を過ぎた村人は二人、残り十一人は十五歳から五十歳までの租税対象の人々である。

戸数姓名表として村人の姓名、居住している地番、性別、家族数、年齢、氏唐名を記載している。同表は戸籍台帳と似ており、当時の村民の実態を知る手がかりになる。また一八七六年（明治九）から一八八五年（同一八）までの九年間に死亡した村民の人数、さらに配偶者のいない人の数、独身者の氏名、年齢も載る。

八重山の住民を苦しめたといわれる人頭税だが、本史料では表上納人割前表として明示する。男子は上男（二一歳～四〇歳）、中男（四一歳～四五歳）それぞれ一人で平民、下々男（二五歳～二〇歳）一人で土族、女子は上女（二二歳～四〇歳）三人、中女（四一歳～四五歳）、下女（四六歳～五〇歳）各一人で、それぞれ平民となっている。

租税負担量をみると、上男の場合で貢納米七斗五升七合八勺一才（四八・五％）、所遺米七斗七升七合八勺六才（四六・六％）で一石四斗八升五合六勺七才で全体の九五・一％を占める。備蓄米は七升三合六勺四才で四・九％と僅かしかなく、苦境の生活ぶりが窺える。全体では一石五斗六升二合二勺八才である。租税の負担率は中男、下々男もほぼ同じである。上女の場合では貢納米七升六合六勺一才、貢納布白上布一丈二尺五寸七合である。

免税人は男子が村筑、渡場守、女子が亡筑登之妻、神司、女頭の合計五人である。仲間川の渡し舟は、小形丸木舟で一艘のみ。

「村用船皮渡シ用」と記す。

家畜部は、村で飼育する家畜の頭数、売価などを記す。村では一八八五年（明治二五）当時、馬一頭、牛十七頭、豚一頭、犬二

十頭を養っていたようで、鶏は羽数不明。牛と犬の多さが目につく。牛は肉用牛として牧畜していたようで、それは貴重な収入源となる。犬は猪を捕る獵犬として飼育されていたと思われる。

地理部は、御嶽、御嶽にかかわる祭祀、それに田地、畑地、芭蕉植え付け地、宅地の面積、地価、牧場、河川、橋梁、山林、村内や山中に繁茂する樹木、字地を書き記し、自然地理および人文地理を詳細に知ることができる。

史料をみると、御嶽は三カ所にある。崎枝御嶽は、南風見村内佐久田の海辺に位置するとある。同御嶽については、一八八一年（明治一四）の『大地方村之御嶽並伊部名拝殿坪数神官人調帳』に仲間村構えとして仲間村に所属し、創建は不明。神司はコヤマとある。祭神はイヒソ。嶽域は千六百三十坪と広い。『琉球国由来記』巻二十一にも同嶽があり、古見村の管轄とされている。以上のことから、本史料および『大地方村之御嶽並伊部名拝殿坪数神官人調帳』『琉球国由来記』は記述内容が微妙に異なり、御嶽の場所を確定することが難しい。

仲嵩御嶽は、村の西北部宇阿嘉木明にある、と記す。そこで小字の阿嘉木明とは一体どこにあるのか。そのような地名は現在、残っていないようだ。

仲島御嶽は、村の東方の字仲島の海辺にある、と記す。場所は明治二十年代に書かれたといわれる、温故学会所蔵の古地図に記載があり確認できる。

三御嶽とも毎月一日と十五日には神司らは御嶽で祈願する。祭祀の年中行事は山留め祭、徳利祭、節祭、種子取祭の四つ。これらの祭りは、他の集落も同様である。

田地は九町一反五畝七十八歩二分。そのうち上納作地が四町五反七十八歩二分で四九・二%を占める。残り四町六反五畝が村人が個人的に稲作できる面積となる。

畑地は二町五反二畝十三歩六分。上納作地はなく、すべて村人が作付けできる面積である。畑地にはサツマイモが植えられ、村人の食料としたようである。

芭蕉栽培地は一反三畝八十三歩四分。その面積に芭蕉を四千株を植え付ける。鉄蕉栽培地は六反三畝三歩四分。その面積のなかに鉄蕉を凡そ二千株を植え付ける。ただ鉄蕉とは何であるのか不明だが、ソテツの可能性が高い。

地価は四種類に分類され、上地、中地、下地とランクづけられる。平均地価は、田地一カヤタに付き米六俵、畑地は一コーチに付き米四俵、宅地は十坪に付き米二五升、休作地は一コーチに付き二俵となっている。ただカヤタ、コーチの意味ははっきりしない。

牧場は、村の西北隅のヒサ山から東北隅のイタ山の一帯に、東西二百三十間（約五百八十二歩）、南北八百間（二千四百五十六歩）に広がる。このなかでヒサ山、イタ山はどこにあるのか、今後調査を要する。

河川は四つ記す。浦田川、後川、大縄川、ヤラタ川がそれで位置、幅員、延長、水量、水源、川質、運輸について書き記している。ただ、川の名称は現在使われていないようだ。仲間川の北側に新港川、南側にサシ川、さらに仲間川の支流に西船着川、ヤツサ川など数種の川が流れ、上記の四川はこれらの別名であるかもしれない。今後の調査課題である。また現在、聞き慣れない地名

もいくつかある。浦田川とかかわるカラマ崎、赤崎、後川のヨイイタ、ホカスク、大縄川のカテル山、ヤラタ川のナーバコ山である。ヨイイタは小字のヨコイダ、カテル山はハテル山のことを指すのか、調査をする必要がある。

橋梁は大縄川に架かる橋ひとつである。大縄橋として南風見村との境界にある、と記す。幅員間（約一・八二畝）、延長二十七間（約四九畝）。橋脚は石材を用い、木板を上部に架ける。前湊渡地は浦田川の末流にあり、カラマ崎、トサラ崎を対岸にして設置、とある。カラマ崎は仲間川河口の北側、トサラ崎は南側に位置することになるのだろうか。渡し場には渡し舟守が一人おり、小形丸木舟を操って村人を対岸へと輸送した。公共的な業務に従事しているためか、人頭税を免税されている。

山林に関しては御座岳近くのブリミチ山を取り上げる。調査事項は山の位置、周囲、幅員、境界、山勢などである。境界を記すなかで竹富島、黒島、新城島の山林のことを触れる。西表島は亜熱帯常緑樹に覆われ森林資源は豊富である。三つの島は、それぞれ島独自の山林を保有し、島人は山中に入って木材を切り出していたのであろうか。

村にかかわる樹木については村内、山中に繁茂する樹木の数々を紹介する。その樹種は、三十一に及ぶ。名称を和名と方言名で記していることに特徴がある。樹木のなかには、木の大きさ、自生する本数を解説しているものもある。里山は仲島山、ヒサ山、田原後山、フリグチ山を取り上げているが、位置、幅員、反別、樹木の説明はない。

村落には字地がある。古屋敷原、阿嘉棚、屋良部野、ヨイイタ

しれない。今後の調査課題である。また現在、聞き慣れない地名

田原後野、キイ泊野、ミイザキ野、前ノゴノ潟原の八種の小字である。小字は詳細に説明され、内容を読むと小字の位置、広がり具合が浮かび上がり、仲間村が誕生する前に旧村があったことが分かる。古屋敷原は旧村跡とされるが、村名ははっきりしない。しかし、古屋敷原の西北には屋良部村、舟底堂村があったことを明示する。仲間村があった場所は現在、大字が南風見仲で、小字の中に屋敷、ヨコイダ、ウフマタ、田春の地名が四種ある。これらはいずれも仲間村の小字の中には見えない。

物産部は普通物産に米、餅米、白大豆、胡麻、サツマイモ、特有物産には山藍、苧麻、雑品として海人草、大名竹を上げているが播栽、收穫、価格などの説明に乏しい。米、白大豆、サツマイモ、さらに菜蔬の品目として菜菔、冬瓜（トウガン）など十種を上げ、その播種、移植、收穫の時期を明示する。

復命書は最後に一八八五年（明治一八）度、一八八四年（同一七）度、一八八三年（同一六）度貢納高を記す。それによると、八五年度は上男女四人、中男二人、下女一人、下々男女二人、年貢は三石九斗九合九勺七才。八四年度は上男女六人、中男一人、下女一人、年貢は三石六斗九升二合二勺一才。八三年度は上男女五人、下女一人、年貢は三石六斗八升四合一勺一才となり、年々増えている。

（通事孝作）

佐久伊御嶽



仲山御嶽と合祀されている佐久伊御嶽

側と東側にある。祭祀の中心的な聖地として、村人は神行事の時には敬虔な心情で祈りを捧げる。

佐久伊御嶽は大岳の南麓にあり、仲山御嶽と合祀されている。鳥居をくぐると、小川が流れ、小橋を渡って嶽域に入る。拝殿は赤瓦屋根の寄棟式の木造建物で、内部には右側に「佐久伊」の篇額が掲げられ、神棚があり香炉が置かれている。御嶽で最も神高い場所のイビも、仲山御嶽と別個にある。神司は、そこで祈る。

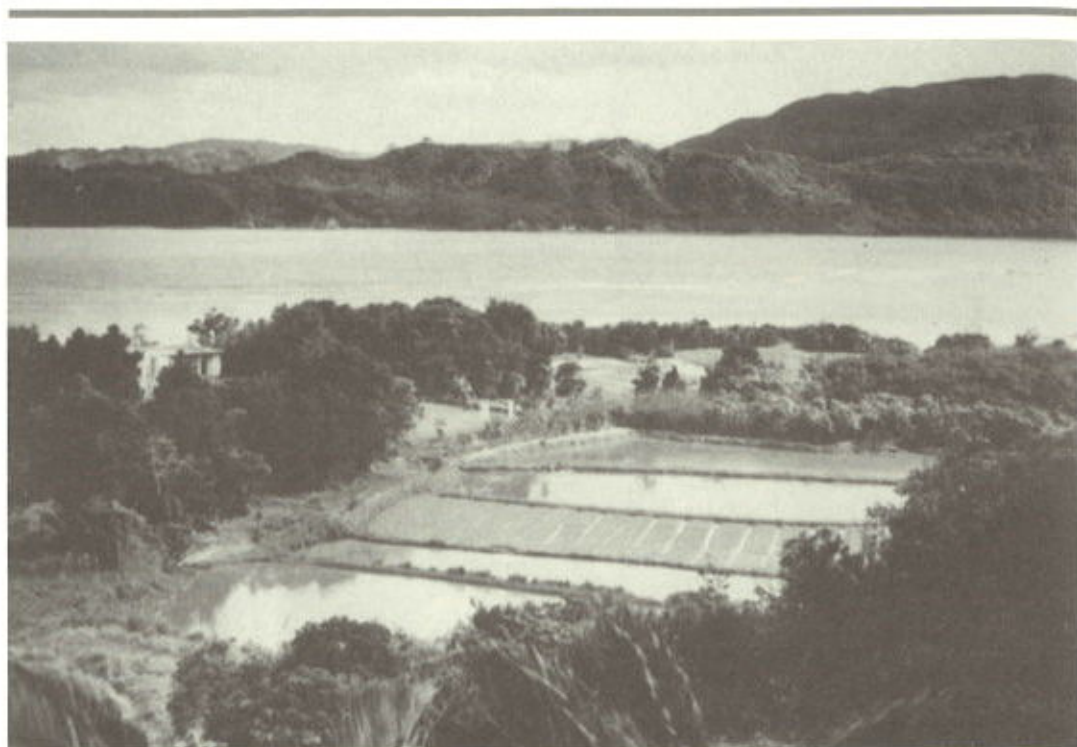
『小浜島誌』(山城浩著)によると、同御嶽の語源となる「さくひ」は、「側近くに寄つてうるさく、さわるものに対して「さばった」ものというが、島の人々は「さばった」が「さくひ」になった」と解説する。この語源からして「此の人の託宣を尊重して、うるさくても水の神の杜に合祀されたことは妥当性があり、更には祀られている人神も本意を遂げて鎮座し、島を守ってもらっている」と展開する。

神司について、同誌は「佐久伊は元来黒島の船道家に由来する」としたうえで

「神司の人となりだが、賢明すぎて時の役人に煙たがられていた。そこで、その人は島から追放される運命となり、オールザ(大阿母)参りに託けて乗船させ、目の悪いのを幸いに、途中、嘉弥真島に降ろされてしまった。島の東海岸辺りにオガンを創設して、自らオガンの神司になった。そして、後に小浜島へ渡ることになった」と記す。

御嶽は、嘉弥真島とかかわりを持ち、関係者によると、現在、同島には御嶽の形跡を残す香炉はないが、約五十年ほど前にはあり、年に四回ほど祈願していたという。神司は与那原(かいま)家の系統に出自をもち、登野貞さん(二月三日死亡)五十年間ほど要職にあったが、現在、与那覇シズさんが務める。

『琉球国由来記』巻二十一には「サクヒ御嶽」とあり、神名はサクヒ神花、御イベ名はマカコ大アルジ。神行事も年間通じて数多くある。行事によっては「夜こもり」の時もある。嶽域は、亜熱帯常緑樹の巨木に囲まれ、近くを流れるせせらぎが清涼感を誘う。



集落の後方に広がる水田

《写真にみるわが町》

自然廃村の網取集落

竹富町の島じまは本土復帰前後、激しい過疎化に見舞われた。一九七一年（昭和四六）に島を襲った、未曾有の台風と大千ばつが主な要因だが、その年に西表島西部の網取が廃村になった。村は、多いときには戸数は約五十世帯、人口は約二百人を数えたといわれる。しかし、廃村時は七戸、二十九人だったという。「それが離島苦には耐えられない」として石垣島等へ村落くるみの移住となり、村が消えた。

網取村は、西表島の陸路の始終点である白浜から海路でサバ崎を回り、辿り着くことができる。村落の周辺一帯は、入り組んだ湾があり、風光明媚な場所である。

村の創建は明確ではないが、八重山が三間切に移行した一六二八年（崇禎元）には村名はみえない。しかし、『宮古八重山両島絵図帳』に入表間切あみとり村とあり、さらに『八重山年来記』の一六五一年（順治八）の項に舟浮、網取両村で人口三十八人と記す。その後、人口の増減があった。

一九六〇年代の集落は、白浜を含めてバルブ原材の搬出地として活気があった。だが、「陸路の不通」「無医村の不安」「交通の不便」などが重なり、住民は厳しい生活を強いられていたようだ。

復帰前は、稲作と造林収入で生計を立てていた。写真を見ると水田が広がる。米作の季節になると、黄金の稲穂が波打っていたであろう。



石垣が延び保存状態のよい集落遺跡

《文化財探訪》

花城村跡遺跡

竹富島に残る中世期の集落遺跡である。遺跡は同時期において八重山では最大規模を誇るようである。島の中央にある現集落静から東方約五百メートルに位置し、周辺の標高は十五メートルほどで、北側は四メートルほどの断崖になっている。遺跡の中には花城御嶽、久間原御嶽、波利若御嶽があり、かつては御嶽の名を冠する村があった、と伝わる。

集落遺跡は、野面石積みで囲まれた、いくつもの廓から成り立っており、道路はない。屋敷間は石垣の中に設けられた通用門があり、住人らはこの門を通して往来していたようである。十四世紀から十五世紀にかけての、この種の遺跡は同島の新里村遺跡や波照間島のマシユク村遺跡がある。両遺跡も保存状態はよく、花城遺跡と同様、中世期の集落を知る貴重な情報を包蔵している。

遺跡の発掘調査は、平成九年度から四力年かけて継続しており初年度は遺跡の西側の屋敷跡を行った。調査の結果、層序は三層構造で、一層は暗褐色の表土、二層は暗褐色土に貝殻の混入する混貝層、三層はほとんど貝殻の堆積で占める貝層となっている。

石垣遺構の中から人骨が検出されたほか、八重山式土器、青磁、白磁、褐釉陶器、染付、鉄製品、貝製品それに自然遺物のシャコガイ等の貝類、獣魚骨が出土している。人工遺物では八重山式土器が九〇％を占める。土器の中には復元可能なものが多い。

竹富町議会	平成10年竹富町議会会議録(第5回)	県史料編集室	沖縄県史 資料編8 自由移民名簿
"	"	今歸仁村歴史文化センター	山原のムラ・シマを描く
"	"	県史料編集室	歴代宝案研究第10号
沖縄県教育委員会	文化課紀要 第2号	歴代宝案校訂本第8冊	
"	"	八重山文化研究会	八重山文化論集第3号―牧野清先生米寿記念―
"	"	宮良當壯博士生誕 百年記念事業期成会	宮良當壯博士生誕百年記念誌 ―七転八起―
"	"	普請帳研究会	沖縄・竹富島の家造り
"	"	石垣市史編集室	村むら探訪―平久保村の移り変わり―
"	"	県史料編集室	沖縄県史ビジュアル版4 ペリーがやってきた
県史料編集室	沖縄毎日新聞見出集④	沖縄県史 資料編7 伊江親方日々記	史料編集室紀要 第24号

購入図書紹介

多数の書籍を購入していますが、紙面の都合上その一部を紹介し
ます。

著者名	図書名	発行所名	門奈直樹	雄山閣出版(株)
琉球新報社	琉球新報縮刷版	琉球新報社	東京大学総合研究資料館	烏居龍藏博士撮影写真資料カタログ
"	一九九八年 九月号	"		第一部解説
"	" 一〇月号	"		第二部写真
"	" 一二月号	"		第三部写真
宮良高弘	日本文化を考える	(株)第一書房	本山桂川・喜舎場永珣 佐喜真興英・宮良当壮	日本民俗誌大系
飯沼二郎	沖縄の農業	(株)海風社	島袋源七・茂野幽考	全12巻 第1巻 沖縄
高阪薫・秋山紀子 武藤美也子・神野富一	沖縄祭祀の研究	(株)翰林書房	外間守善・波照間永吉	定本 琉球国由来記
照屋善彦・山里勝己琉 球大学アメリカ研究会編	戦後沖縄とアメリカ 異文化接触の五〇年	沖縄タイムス社	山里純一	沖縄の魔除けとおまじない
池宮正治	混効験集の研究	第一書房	高橋恵子	沖縄の御願ことば辞典
				ポーターインク
				第一書房
				(株)角川書店
				(株)角川書店
				東京大学総合研究資料館
				安江良介
				日本の自然 地域編8 南の島
				雄山閣出版(株)

業務日誌

◆一九九九年(平成一一)

七月一日

- ・「新聞集成Ⅳ」掲載の新聞記事整理業務継続。
- ・「鉄田義司日記」文字入力作業継続。
- ・沖繩県史料編集室の玉木園子専門員、資料収集のため来室。
- ・税務大学校沖繩研修支所の平良邦利庶務係長、資料収集のため来室。

七月二日

- ・町史編集室定例会議、七月の業務日程検討。
- ・高那村調査のため、税務課から土地台帳を借用。
- ・町制施行五一周年記念永年勤続者表彰。
- ・「統計」関係資料整理作業継続。

七月五日

- ・「新聞集成Ⅳ」収録記事選択完了届け、登野原武委員提出。
- ・東京大学名誉教授文学博士・窪徳忠氏、「火の神」調査のため来室。

七月六日

- ・高那村資料の調査、分析(人口動態、地籍図)および歴史年表の作成。
- ・石垣市立八重山博物館所蔵資料の使用許可願提出。

七月一三日

- ・高那村、与那良村、花城村の資料収集および分析

七月一九日

- ・浦添市立図書館長・又吉盛清氏、資料収集のため来室。

七月二一日

- ・高那村について小浜島出身の美差氏から聞き取り調査。

七月二六日

- ・「鉄田義司日記」の語注作成に着手。

七月二七日

- ・行政文書整理編纂業務、南山舎に委託。

七月三一日

- ・波照間島のムシャーマ撮影のため、職員一人派遣(一泊二日出張)。

八月二日

- ・「鉄田義司日記」文字入力作業継続。

- ・「新聞集成Ⅳ」掲載の新聞記事整理業務継続。

- ・「統計」資料の整理作業継続。

八月一〇日

- ・町史編集室定例会議、八月の業務日程検討。

八月一一日

- ・八重山地域史協議会、高那村の史跡巡見および調査。一人参加。

八月一三日

- ・「新聞集成Ⅳ」収録記事選択完了届け、石垣久雄委員提出。

八月二〇日

・行政文書分類整理編纂保存業務完了。

八月二七日

・尚学院専任講師・宮良安彦氏、竹富町の民話関係の資料提供のため来室。

八月三〇日

・「新聞集成Ⅳ」収録記事選択完了届け、池城安伸員提出。

九月一日

・「欽田義司日記」追加分文字入力作業継続。

九月七日

・「新聞集成Ⅳ」収録記事選択完了届け、本成善康委員提出。

九月八日

・町史編集室定例会議、九月の業務予定検討。

九月一〇日

・「新聞集成Ⅳ」収録記事選択完了届け、三木健委員提出。

九月二〇日

・沖縄県地域史協議会西表研修会で使用する資料の作成に着手。

一〇月六日

・沖縄県地域史協議会西表研修会史跡巡見の事前調査（日帰り出張、職員三人派遣）。

一〇月七日

・町史、だより第16号発行。町内全世帯および関係機関へ配付。

一〇月一四日

・沖縄県地域史協議会一九九九年第二回研修会、竹富町離島振

興総合センターで開催。各市町村史担当者四〇人参加（一六日まで、二泊三日出張、職員四人派遣）。

一〇月二二日

・「近代文書」「近世文書」編集について里井洋一委員と協議。

一〇月二八日

・「新聞集成Ⅳ」収録記事評価委託契約、第十一巻専門委員と締結。

一一月一日

・町史編集室定例会議、一一月の業務日程検討。

・「欽田義司日記」文字入力調整作業継続。

・「新聞集成Ⅳ」収録記事整理作業継続。

一一月四日

・行政文書分類整理編纂業務、南山舎と契約。

一一月五日

・「新聞集成Ⅳ」収録記事選択完了届け、上江洲儀正委員提出。

一一月一六日

・沖縄タイムス縮刷版（一九九五年一月、二月、一九九六年）一九九八年までは一月から二月購入。

一一月一八日

・町史編集室臨時会議。

一一月二二日

・「青」の会主催、第二回文化講演会および全国交流会（職員一人派遣）。

一一月二三日

・小浜島の遺跡写真撮影および聞き取り調査（沖縄国際大学八重

山郡口承文芸学術調査団と合同) 一泊二日出張(職員一人派遣)。

一月二五日

・波照間島の遺跡写真撮影および聞き取り調査(沖縄国際大学八重山郡口承文芸学術調査団と合同) 一泊二日出張、職員一人派遣。

一月三〇日

・「鉄田義司日記」印刷製本契約、八島印刷と締結。

二月一日

・「鉄田義司日記」地図作成のため、石垣市在住の新城正三郎氏から聞き取り調査。

二月六日

・町史編集室定例会議、一二月の業務予定検討。

二月六日

・「鉄田義司日記」原稿、八島印刷へ入稿(第一回)。

二月七日

・「新聞集成Ⅳ」収録記事決定。

二月八日

・「鉄田義司日記」解説執筆。

・第十二巻専門小委員会と「鉄田義司日記」添削委託契約締結。

二月二〇日

・町史編集室臨時室内会議。

◆二〇〇〇年(平成一二)

一月五日

・町史編集室定例会議、一月の業務予定検討。

一月一七日

・八重山郷土新聞原寸大製本請負契約を(有) 沖縄マイクロセンタ―と締結。

一月一九日

・町史編集室臨時室内会議。

・沖縄県公文書館歴史講座「島々の歴史と文化を訪ねて(八重山編)」聴講および資料収集(南風原町へ一泊二日出張、職員一人派遣)。

一月二一日

・「海上の道再考シンポジウム」聴講および資料収集のため、宜野湾市へ職員一人派遣(二泊三日出張)。

二月三日

・「鉄田義司日記」原稿、八島印刷へ入稿(第二回)完了。

二月五日

・第一五回町史編集委員会および波照間島の史跡巡見。

二月八日

・町史編集室移転のため美崎運輸(株)と運送契約締結。

二月二四日

・町史編集室、石垣市美崎町二番地に移転。

三月七日

・臨時職員の新城たか子、退職。

三月八日

・町史編集室移転通知書、関係機関に送付。

編集後記

◆『竹富町史だより』第17号を発刊しました。本号は「八重山島管内西表島仲間村巡検統計誌」を中心として、小浜島にある佐久伊御嶽、網取村、竹富島の花城村跡遺跡を取り上げ、紹介しました。また、町史第12巻資料編「近代」を審議した、第15回町史編集委員会、波照間島の史跡巡見の様子も広報として入れました。

◆仲間村巡検誌は、明治初期に八重山を注目した田代安定が明治十八年に同村を訪れるとともに、当時の八重山島役所からの資料収集してまとめた、村勢に関する記録です。彼が訪問した時は、まだ人頭税が施行されており、記録にある一部の統計資料の数値から村落の実態を垣間見ることが出来ます。しかし、地名など分からない点もあります。今後の調査が必要となります。



平成12年3月31日 発行

竹富町史だより

第17号

編集発行 竹富町役場町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地大和ビル2F東

☎ 09808-2-9985

印刷 八島印刷